

「隆房卿艶詞絵」をめぐって

——いわゆる「藤波絵草紙」の出典とその性格——

秋 山 光 和

内 容

- 一 はじめに
 - 二 絵巻の詞と「隆房卿艶詞」
 - 三 「隆房卿艶詞」の内容
 - 四 藤原隆房と小督
 - 五 「隆房卿艶詞絵」の図様
 - 六 「隆房卿艶詞絵」の性格
 - 七 制作の年代とその背景
- 関係年表

「隆房卿艶詞絵」の詞と諸本との対校

一 はじめに

原典不明のままに近頃では「藤波絵草紙」と仮りの名で呼び慣らわされていた白描の絵巻一卷 (Pl. V-VIII)。軸付に貼られた極札には「源氏蘆手画卷 土佐光正筆」とあり(挿図1)、十八世紀末の「倭錦」にも「土光正」の条に「一、源氏蘆手書草子」と記載される。

「隆房卿艶詞絵」をめぐって

かつて大阪の藤田家に所蔵されていたが、のち益田孝氏の愛蔵に加えられることとなった。昭和六年、佐佐木信綱博士は「思想」一〇四号に一文を発表され、その詞書を鎌倉時代における珍しい長歌の一例として全文を紹介されている。その後絵巻としてはあまり世間の注意を惹かなくなったまま戦後益田家の手を離れ、諸家を転々とした。たまたま昭和三年秋、東京国立文化財研究所の開所記念日の小展覧に白描やまと絵を集めることとなり、出品作品を選んでゆくうち、田中一松所長がゆくりなくも某氏のもとでこの絵巻に再会され、やがて浅田長平氏の蔵品としてこの展覧に花を添えたことから、にわかに研究者の関心を集めるに至った。翌三三年二月には、展覧の際における田中所長の命名に従い「藤波絵草紙」の名で重要文化財に指定された。続いて「美術史」二八号(同年三月)には田中一松、宮次男両氏による図版解説がのせられるなど、この名称はようやく一般化するに至った。昨三五年五月、京都国立博物館で行われた「日本の説話画」展覧会にも、同趣旨の解説をつけて展覧され

挿図1 「隆房卿艶詞絵」軸付の極札

(追記参照)
た。

私も田中所長がこの絵巻に再会された席に同座した因縁もあって、かねてこの絵巻には特別の関心を抱いており、ことに特色のある長歌の出典、引いては絵巻に描かれた物語の内容を推定することができればと願っていた。けだしこの絵巻の全巻を写真によって改めて紹介するためには、内容を明らかにし、妥当な名称を与えることがまず必要と考えられたからである。

たまたま今年の正月、家ごもりの余暇に群書類従を見てゆくと、雑部三五に収められた前大納言隆房卿の作という「艶詞」のうち最後につけられた長歌が、この絵巻の詞書とほとんど一致していることに気づいた。これは私にとってまさに二重の驚きだった。問題の詞書が意外なほど手近にあったというばかりではない。それが平家時代の一才子、藤原(冷泉)隆房の作になるということの興味によってである。何故ならば隆房の作には、同じく群書類従所収の「安元御賀記」が伝えられている。しかもこの「安元御賀記」こそは、やはり白描絵巻の一つで、これまで出典不明とされていた「平家公達草紙」と密接な関係にあることを、私はかねて中村義雄氏の教示によって知っていたからである。さらに隆房その人について調べてみ

れば、彼が「艶詞」にうたった悲恋の対象こそ「平家物語」を彩る薄幸の美女小督にほかならず、白描のこの絵巻に写し出された女主人公にも、その名を与えることが出来ることが分かったのである。

永い間の気がかりを偶然に解くことの出来た喜びを、私はまず田中所長にお知らせしたが、そのおすすめもあって一月十八日、研究所内の研究会でこの結果を報じた。

さらにかねてこの絵巻の全巻の写真を掲載紹介することになっていた「美術研究」にも報告をのせるようにとのことで、関係資料、特に隆房と小督の物語をめぐる従来の諸説を検討した。後述のように国文学方面では、この問題は平家物語の素材論のひとつとして取りあげられており、特に後藤丹治氏などにすぐれた研究がある。^{註2}この後藤氏の研究に追記されたところから、さらに市古貞治氏が昭和十二年「艶書小説の考察」という一論文でこの隆房卿艶詞に言及され、佐佐木博士の紹介による藤波絵巻の詞書がこれから出ている旨を註記しておられることを知った。^{註3}すなわち美術史界で永いこと疑問としていた点も、国文学界の少なくとも一部では、かなり以前にさりげなく紹介されていたことになり、今更にこの二つの関連学界相互の交流の必要を痛感させられたのであった。^{註4}従って私が今度気づいたことも、単に両者の一致という点だけからは改めて報告するに当たらないかもしれない。しかし美術史の立場とすれば、そこからさらに数々の問題が拮ってくるので、これまでに調査考察しえた点をまとめて、この絵巻の特殊な性格をさぐることにした。

二一 絵巻の詞と「隆房卿艶詞」

この白描の絵巻一卷は現在縦二五・三センチ(八・四二寸)、全長六八四・九センチ(二四〇・一八寸)で、十三紙継ぎ(四六ページ法量参照)となっている。

詞書は巻頭にまとめられ、一段だけで首尾完結するように記される。本稿末に写真と本文とを付載したが、金銀泥で桜や遠山を描いた美しい料紙四紙にわたって、五七調の長歌を一行三句ずつ六三行に書き、終りに反歌三紙を添えてある。第五紙以下はすべて白描の図様が續いているが、図柄からみるとそれ等はほぼ四段に分かれている。しかも最初の一、二段とあとの三、四段それぞれの境目は霞でぼかして図様を連続させてあり、第二段と第三段の間のみ、紙継ぎの部分ではっきり図柄も切れている。各段の細かい図様とその内容については後に改めて述べることにするが、主として吹抜屋台の屋内に相對する男女の姿をあえかに描き出したもの。図様からのみでは特定の物語の内容を抽出しにくく、僅かに最後の一段が社頭に詣でる被衣かぎ姿の女達を遠見に配するにすぎない。ただこの絵巻の特色とするところは、最初の二段において、各々の図様に風情を添える桜、梅の三種の樹幹に文字を組合せ、所謂あしで書の手法でそれぞれ「のどかに」「木だかき」「としたち」と読ませていることであろう。江戸時代からの名称「源氏蘆手書草子」の名がこれに由来することは勿論である。しかもこれらの三句いづれも詞書の長歌から取られたもので、両者の一連たることはいうまでもない。

「隆房卿艶詞絵」をめぐって

ところが付載の全文で見られるように、この詞書の長歌は遂げられぬ恋の悲哀と情緒とを、きわめて詠歎的に歌いあげたもので、主人公の名前はおろか、具体的な事実らしいものを何ら指示していない。第一に主格となるものが、男性であるか女性であるかも不明瞭で、田中・宮両氏の解説はこれを女性の歌ったものとして図様をも解釈しておられる。従ってこの絵巻の内容や性格をさらに明らかにするためには、どうしてもこの長歌の原拠を知り、その背景をさぐる必要があるわけである。

前記の事情で知られるようになった「隆房卿艶詞」の長歌と、この詞書との関連は、この稿の終りに対校の結果を付載したとおりで細部の異同はあっても両者の一致は疑うべくもない。「隆房卿艶詞」自体にも次に述べるように流布本(群書類従本)のほかに数種類の異本が知られているが、絵巻詞書との関係においては大差を見出せない。

詞書と「隆房卿艶詞」との比較で最も著しい相違は、長歌の中程で現存の諸本はいずれも絵巻詞書より二句脱落しており、また最後の反歌も詞書では三首あるのに対し、諸本とも終りの一首(「しるらめや……」)を欠いていることである。その他の語句の比較から見てもテキストとしては絵巻詞書の方がよりオリジナルに近いことを感じさせる。現存諸本、いずれもその筆写年代は絵巻にくらべてはるかに若い点からみて、転写の間にこうした脱落や崩れを生じたものであることは誤りない。

群書類従所収本はその奥に「右隆房卿艶詞、以一本校合」とあるばかりで、その性質も所在も現在不明である。しかしその後調べてみると、同じ内容のものが、種々異った標題で幾本か伝存していることが分った。

1 扶桑拾葉集所収「艶詞」

2 桂宮本「隆房集」(内題「荒玉年月」)

3 高松宮本「四條大納言日記」(内題「たかふさの恋つくし」)

これらのうち扶桑拾葉集は、その巻九の末に「艶詞」を後述する「安元御賀記」とともに収めているが、その内容は群書類従本とほぼ同じく、最後の反歌も二首だけである。しかし付載の校異に示したように、群書類従本よりも詞書に一致する箇所が一、二あることは注意されよう。桂宮本「隆房集」は桂宮本叢書第五卷(私家集五)に収めて公刊されているが、その解題によると江戸初期の書写本で

挿図2. 高松宮本「四條大納言日記」
"たかふさの恋つくし" 巻頭

外題は靈元天皇、特別の奥書はない。その内容は類従本の短歌七十七首に対し百首と歌数が多く、各歌の詞にも異同がある。ただし、これには最後の長歌が全く載せられておらず、残念ながら絵巻詞書との対校資料とはなし難い。高松宮本もやはり江戸中期の筆写と思われる鳥の子紙本紙の美しい写本で、その題名は大変異っているが、内容的には「艶詞」に近く、最後には長歌がつけられている。高松

宮家の御厚意により調査撮影を許されたので詞書との対校に加え、かつ一部を挿図2・3・4に示した。^{註5} 詞書より反歌が一首少ないことや、途中が二句欠けている点は「艶詞」の

挿図3. 同 41丁 長歌の始め

挿図4. 同 巻末

場合と同じであるが、群書類従本よりは誤りが少ない。二つの題名のうち「たかふさの戀つくし」という内題は、後藤丹治博士^{註2参照}によれば文永頃に作られた「文机談」に冷泉隆房のことを記した中に「朗詠百首、戀つくし、かやうのものまでもいふにつくりとどめ給へり」とあるのに一致し、この書の古名であろうとされる。なお同博士はこの外の伝本として、

4 神宮文庫本 隆房卿艶書合

5 押小路家本 隆房卿歌はなし

を挙げておられる。いずれも内題が「隆房の恋づくし」となっている由であり、この題名が古くからのものであることを示している。

一方桂宮本「隆房集」の解説によると、この種の異本は旧阿波国文庫本、三手文庫本があり、両者はともに「京極黄門以自筆写之畢右之奥書之本にて令書写」という奥書を持つ定家本系統とのことである。歌数は桂宮本と同じく百首あるが、詞書が著しく省略されている。しかしこの系統の本が、もと定家が作者自筆本を写したものであるから出ているとされることは、後述する鎌倉時代における隆房の文名を考える上に興味深い。

三 「隆房卿艶詞」の内容

群書類従本の表題によれば「艶詞(つやことば)」、あるいは「隆房卿艶詞」「四条大納言日記」、さらに古くは「たかふさの恋づくし」と呼ばれていたこの特異なテキストには、かくて大別すると二つの

「隆房卿艶詞絵」をめぐって

系統が考えられる。すなわち最後に長歌と反歌とをつけた高松宮本や群書類従本、扶桑拾葉集本などの一群と、これより歌数が多く、そのかわり長歌の部分をつまみ桂宮本「隆房集」の系統とである。このうち前者が一種の歌物語、後者が私家集として取り扱われていることは、和歌とその詞書とを連続させていったものがやがて一篇の物語に変わってゆくという、平安朝物語発生の期的な形態をとどめた、このテキストの性格を逆に暗示するものと言いうる。さて、このテキストの内容を第一類によって眺めてみよう。諸本いずれも最初に、

あらたまのとし月を、をくりむかふるにつけて、おもふ事なきにしもあらぬ身の、人しれぬ恋地にさへ、おもひいりぬるよしなきを……

という序文があり一首を添えたのち、長短さまざまの詞書を先立たた短歌、七十七首をほぼ編年順に並べ、日記と歌物語との中間的な作品となっている。文中には固有名詞が一切みられず、主語のはっきりしない場合も少くないので、これらの歌の集成から、一貫した物語の展開をつかむことは容易でない。しかし全体を通じて次のような筋が浮びあがってくる。一人の女性に想いをかけた男が、やがてその恋を成就させるが、女は思いがけず入内することとなり、自由に出逢うことも難かしくなる。男はこの恋を思い切ろうとするが、かえって想いはつのるばかり、日夜かの女の面影を忘れることができない。ようやく文を届けても女はこれを開かず返して来る。最後に逢った夜からちょうど一年たった秋、その折の場所に行つて

一夜を泣き伏したりする。やがて年も変わり今年こそは忘れようと決心するが、かえって心は迷い、参内してのおり偶然に女の声を聞いたりしただけでも、恨めしく忍び難い。自分のほかにかほど苦しい想いをするものがあるうかなどと、心を悩まし、在りし日の想い出と、ゆく末の耐え難さの中に日を送ってゆく……。すなわち、全編が裂かれた恋の苦しさに貫かれ、長歌もまたこの同じ主題を繰返している。

問題の白描絵巻がこの長歌を詞書に持つ以上、この「艶詞」の内容を絵画化したものであることは明らかであるが、ただそのテクストだけからは、右のような悲恋の経緯がおぼろげに浮び上がるにすぎない。そこで他の資料によってこの物語の内容をもっと明らかにしてゆく必要にかられる。

四 藤原隆房と小督

群書類従本の「艶詞」には、作者として「入道大納言隆房卿」の名が記されており、これと同内容の桂宮本は、表題が「隆房集」、中扉の題が本文の第一句を採って「荒玉年月 隆房集」となっている。後述するように、この集の歌のうち九首が「千載集」以下の勅撰集に、隆房の歌として採られていることからみても、これが藤原(冷泉)隆房の作であることは疑いない。

隆房は藤原魚名の末で四条家の祖となった隆季の子、ただし彼自身は居宅の位置から冷泉隆房と呼ばれる。その伝歴については文末

の年表にまとめておいた。久安四年(一一四八)に生まれ、永暦元年(一一六〇)十三歳で従五位下、加賀守に任ぜられたのを始めに、仁安元年(一一六六)右少将、治承三年(一一七九)右中将に進んだ。寿永二年(一一八三)には左中将から藏人頭、参議、文治五年(一一八九)権中納言、正治元年(一一九九)中納言。翌二年一たん宮を辞したが、建仁四年(一二〇四)還任して権大納言となり、元久二年(一二〇五)辞退、翌建永元年(一二〇六)出家して寂恵と名のつた。歿年は明らかでないが、おそらくは同じ年のうちに歿したものと思われる。

平家滅亡後における彼の後半世はあまり華やかなものだったとはいえない。歌人としての名声も定家や家隆などには及ばず、廷臣としての地位も最後に父と同じ権大納言を称し得たにすぎない。その得意の時期はやはり平家時代にあった。藤原氏の出ではあったが、平清盛の女婿(源平盛衰記によれば第八女の夫)として、むしろ平家の公達たちにまざって耀かしい宮廷生活を送った(その姿は、「建礼門院右京大夫集」や「小侍従集」など、当時の宮廷才女達の家集にも垣間見られる)。「艶詞」の内容をなす彼の悲恋もこの時期を彩る一挿話として、人々の心を惹いたのである。

「平家物語」の第六卷(一方系の流布本などによる。八坂系の屋代本などでは第三卷)に語られた小督の哀話はまさにこれに対応する。

……中宮の御方より小督殿と申女房をまいらせらる。此女房は櫻町中納言成範卿の御むすめ、宮中一の美人、琴の上手にてをはしける。冷泉大納言隆房卿、いまだ少将なりし時、見そめたりし女房なり。少将はじめは歌を

よみ、文をつくし、戀かなしみ給へ共、なびく氣色もなかりしが、さすがなさげによはる心にや、遂にはなびき給ひけり。され共今は君にめされまいらせて、せんかたもなくかなしさに、あかぬ別の涙には、袖しほたれてほしあへず。少將よそながらも小督見たてまつる事もやと、つねは參内せられけり。をはしける局のへん、御簾のあたりを、あなたこなたへ行とをり、たゞすみありき給へども、小督殿「われ君にめされんうへは、少將いかにいふ共、詞をもかはし、文を見るべきにあらず」とて、つてのなさげをだにもかけられず。少將もしやと一首の歌をようで、小督殿のをはしける御簾の内へなげられたる。

おもひかねこゝろは空にみちのくのちかのしほがまちかきかひなし

小督殿やがて返事もせばやおもはれけめど、君の御ため、御うしろめたうやおもはれけん、手にだにと(ッ)ても見給はず。上童にとらせて、坪のうちへぞなげいだす。少將なさげなう恨しけれ共、人もこそ見れと空おそろしうおもはれければ、いそぎ是と(ッ)てふところに入てぞ出られける。

なをたちかへ(ッ)て、

たまづさを今は手にだにとらじやとやさこそ心におもひすつとも

今は此世にてあひみん事もかたければ、いきてものおもはんより、しなんとのみぞねがはれける。^{註6}

「平家物語」における小督の挿話は、本来この美人に対する高倉院の深い愛情と、それが清盛の暴虐によって悲しい結末を告げる次第に重点がおかれ、隆房と小督の關係はむしろその導入部をなすにすぎない。しかし「艶詞」の中で隆房自身が歌いあげた告白はこの物語と重ね合わせることによって、初めて生々とした実体を伴ってくる。事実「平家物語」に引かれた二首の歌は、そのまま次のよう

な詞書を伴って「艶詞」の中に見出される。

わかき人くゝ集りて、よそなるやうにて、物語などするほどに、忍びかねたる心中、色にや出て見えけん、硯をひきよせて、ちかの鹽竈とかきて、なげをこせたりしことの思ひいでられて

思ひかね心は空にみちのくのちかの鹽竈近きかひなし

わりなくして文をとらせしを、土になげおとして、とらざりしかば

玉づさを今はてにだにとらじとやさこそ心に思ひすつとも

ただ「隆房卿艶詞」のなかでは、この二首はかなり離れて位置しており、その間に時間的な経過を予想させる。平家物語ではこれを一連の事件として扱い、物語としての凝集を試みたところに、説話的な発展が考えられよう。

更に実在の小督自身については、同時代人たちの次のような証言を聞くことができる。

藤原俊成の女で建春門院に仕えた健寿御前の日記(たまきはる^{註7})には、承安三年同女院が建立した最勝光院供養の翌年、すなわち承安四年(一一七四)三月初め、御方違いの法住寺行幸に際しての、女房達の装束が、心をこめて記述されている。なかでも「山吹のほひ、青きひとへ、えびぞめの唐衣、白腰の裳着たる若き人の、ひたひのかかり、すがた、よろひなど、人よりはことに、はなはたと見えしをいまだ見じとて、人にとひしかば、小督の殿とぞ聞きし。」とその美しさが同輩達の中にもひとときわ目立ったことを述べて、更

に、

このたびより、物いひそめて、つぼねの、そなたさまなれば、下るとても具してなどありしが、その後ゆくへも知らず、二十餘年の後、嵯峨にて行きあひたりしこそ、あはれなりしか。

と、その後の悲しい運命をまかいま見させてくれる。

このとき小督は十八歳であったと考えられる。すなわち「山槐記」治承四年（一一八〇）四月一二日の条には、小督が高倉上皇との間にもうけた内親王が四歳で初齋院に立たれたことを述べた際に、

母權中納言成範女、號小督殿、即新院女房也、生宮之後不參、去年冬爲尼生年二十三也、有子細歎、不知其由。

と記され、小督の生年を知りうるばかりでなく、平家物語にうたわれたような悲劇が実在していたことを推察させる。なおまた彼女が再出仕後高倉院の皇女を生んだことについては「玉葉」治承元年（一一七七）十一月四日の条に次の記載がある。

或人云、成範卿女、祇候内裏、年來通御云々此一兩日之間、有産事、皇子皇女之間、其説縦横、後聞皇女云々。

ただし、これらの史料も隆房と小督との関係を直接に証明するものではないが、これについては平家物語の記事を疑うべき証拠はなく、「参考源平盛衰記」の註も早くこれを認めている。その場合隆房と小督との関係が生じた時期が問題となる。既に承安四年（一一七四）に宮仕えしていたことは、前記した「健寿御前日記」の記事により明らかである。更に「艶詞」の中に既に相手の女性が宮仕えし

たあとで、

とよのあかりのよひ、にはかにもえ出でて、うちわたりもまぢかきほどなれば、人々あつまりてのゝしる中にも……

という一節がある。これは「建礼門院右京大夫集」に、

いづれの年やらむ、五節のほど、内裏にちかき火の事ありて、すでに危なかりしかば、……

とある火事と同じもので「清癡眼抄」^{註8}にひく「後清録記」によれば安元元年（一一七五）十一月二十日におこった内裏の近火と考えられる。すなわち前記の法住寺方違えの翌年であり、小督が高倉天皇のもとに出仕して一、二年の間のことと知られる。また「艶詞」に、

なにのまひとかやに入りて、はなやかなるふるまひにつけても、あはれ思ふ事なくて、かゝるまじらひをもせば、いかにまめならましとおぼえて、又さしもうらめしくあだなれば、見る事つゝましく、

ふる袖は涙にぬれてくちにしをいかにたちまふ我みなるらむ

とあるのは、^{註9}すなわち安元二年（一一七六）三月四日から六日に亘る後白河法皇五十御賀の際のことと考えられる。「艶詞」に載せる七十七首のうち年月の推定できるものはこの二首ほどであるが、いずれも小督が高倉院の後宮に入った初期にあたっており、隆房の悲恋の対象を、平家物語の伝えるように小督とすることが自然である。^{註10}

五 「隆房卿艶詞絵」の図様

かようにして、この絵巻の詞書は藤原（冷泉）隆房の手になる「艶

詞」、より古くは「たかふさの恋つくし」と呼ばれる歌物語から出ており、従ってその内容は隆房の小督に対する悲恋を扱ったものであることが明らかになった。次にこれを前提として、絵巻の各段を眺めてゆくと、どのように解釈されるであろうか。もとよりこの本は先に述べたように極めて主観的に恋の苦しみを述べるばかりで、具体的な情景描写や筋の展開などもない。ここでは各段の図様を先ずありのままに記述してゆき、次に章を改めて、本絵巻の性格に鑑みながら、各段の意味を解釈してゆくこととする。

〔第一段〕 まず霞の間にさしのぞく大きな月の下に、咲きさかる桜の花を描きだす。二もとの幹の輪郭をあらわすには「のとかに」

「隆房卿艶詞絵」をめぐって

挿図5. 隆房卿艶詞絵 第一段 細部 隆房と小督

の四文字をくずした葦手書が用いられている。これに向って寝殿の縁近く立つ男の姿と、勾欄によって、やはり花を眺める二人の女が描かれる。おそらく男は主人公隆房、女性のうち正面をみせるのが小督で、この二人の姿を最初に大きく表わしたものであろう(挿図5)。男は冠直衣、女は正式の女房装束をつけている。風俗上の考証からは女房がかように唐衣裳からぎぬもの晴姿をしているのは宮中か摂関家以上の邸でなければならぬから、高倉天皇の御所に仕える小督と、隆房の姿となる訳であるが、入内後に二人だけが内裏で会うということはこの物語の眼目に反する。後段にのべるように、ここではもっと象徴的に

幸福だった二人の姿を桜の花に配して、絵巻の最初としたものと考えたい。

〔第二段〕 最初の建物を霞の中に描き消して自然と第二段に移る。吹抜き屋台として斜めに屋内をみせ、近景には藤のさきかかる松の梢を描き松にからませて「木たかき」の四字を葦手に入れている。屋内には物想わしげな冠直衣

挿図6. 同上 第二段 細部 絵をかく小督

の男が一人、扇を手にして坐り、その前から次の間にかけて四人の女房が居ながれる。さらに坪庭を隔てた別棟の一室に、一人だけ離れた女性が描かれる（挿図6）。前には紙が拡げられ手ずから花の絵を描いているようにみうけられる。傍らにはやはり絵をかけた草子が置かれ、巻いた紙の束も沢山に積まれている。前の男はやはり隆房で、後宮の女房たちに立ち混りながらも心はやはり小督のこのみを追っている有様であろう。すると離れて一人いる女性は小督となり、なるべく隆房から身を隠さうとしている姿かと思われる。小督は琴の名手として記載され、絵をよくしたとは記録にはみえないがその女性としての理想化された姿を描くのこのような表現を採ったとしても不自然ではない。

この別棟、絵を描く女房のいる建物の向側からは満開の梅が枝を伸ばし、新柳が糸を垂している。梅の幹によせて「としたち」の四字を葦手にかき込んである。いかにも新春のうららかさを象徴するような図立てであり、屋内で女の描きさしているのもこのような花の枝であることが興味深く眺められる。

この第二段は、かように建物によって二つの部分にわかれておりしかもそれぞれに葦手の文字が描込まれて、季節感も初夏と早春とにわかれている。従ってこれを前後別々の段にわけて数えることも可能であろう。しかし二つの建物の間は他の段落のように描き消されたりはせず、図柄としては一つにまとまっております前記のように前後照応している。後に述べるように、もともとこの絵巻は具

体的な物語の筋を描くというより、恋の情趣をあらわすことを主眼としているので、ここではむしろ各場面をつかず離れずの関係にないでゆき、季節の推移を一図のなかにあらわすことに一つの特色があるといえよう。

この梅と柳のある庭の向うの建物は深く御簾をおろし、女房の装束を透かしている。この装束の形は一見すると次の女房の姿に続くかのようにみえるので、田中・宮内氏の解説もこれを一連として扱っておられる。しかしよく見れば、この間は紙も切れ図様も全くなかれているので、ここでははっきりと段落づけられることは明らかであろう。

【第三段】この段は最初の室内で低い机を囲んで語り合う女房の一群と、左方の部屋の三人の男女とにわかれている。一図の主眼はもとよりこの左方の部分にある。

ここは上げ畳の上に坐し、燭台を間にして向いあう二人の男と、傍らにやや離れて、半ば袖に顔を隠して俯向く一人の女とを三角形に構図している（挿図7）。このうち顔を正面にみせた右端の男子の装束は、鈴木敬三氏の御教示によると、天皇あるいは上皇の召料である御引直衣おひまのうしろである。するとこれは高倉天皇その人を表わしたものと考えられ、相対する人物は従って隆房となろう。第三の女性はすなわち二人の恋の対象である小督とみるのが最も自然である。隆房の生涯の中で実際にこのような場面があったかどうかは別にして、この恋物語の主役をなす三人を象徴的な形に置いたこの場面はなかな

かに意味深い。

ところで御引直衣といえ、まずわれわれの頭に浮ぶのは「源氏物語絵巻」(五島美術館本)の鈴虫第二段における冷泉院の姿である。

挿図7. 隆房卿艶詞絵 第三段 細部 高倉天皇と隆房、小督

そこでは冴えわたる月光の中で実の父である光源氏と語り合う冷泉院の宿命的な姿が、この図とはちょうど逆勝手に置かれていた。しかしその姿や、特にこれと相對する源氏のやや俯向いた横顔、冠直衣の身のこなしはこの場の隆房のそれと相通じており、運命的な二人の主人公を向い合せる図柄が、斜の方向を逆にしただけでほぼ一致していることは興味深い。またこれに小督を加えて三人の主要人物を三角形の各頂点に置く構図法が、同じく御法の段の源氏と紫の上、それに明石中宮を加えた三人物の構成、あるいは柏木第一段の朱雀院、源氏、女三の宮のそれを思わせることはいうまでもない。勿論この図の作者が直接現存源氏絵巻に影響されたかどうかは別として、この絵巻の古典的伝統にきわめて忠実な一面を示すことだけは確かである。この一群に比べれば次の間の女房達は、流れる黒髪や正装した唐衣裳からぎぬもの複雑な線条が白描ながら華麗な雰囲気をつくりだし、それが構図上の効果と共に、三人の主人公の悲劇性を一層強調している。こうした着飾った女房達が宮廷や貴族の邸の華やかな空気を伝えると同時に、主要人物をひき立たせる働きをしている場面は、やはり源氏物語絵巻の中にいくつも見出される(柏木の諸段、宿木一、二など)。

〔第四段〕 前記の場面を大きく霞で描き出して最後の場面に移ってゆく。これまで全てが屋内の描写であったのに対し、これは戸外を遠景的に表わし、しかもその大部分を霞に隠して極めて情緒的な扱いをしている。社頭の景色で中央に鳥居と社の杜とをのぞかせ、

これに向って参詣の被衣姿かづぎの女房達が連れだつてゆく。左下には主人公の乗り捨てたらしい車を半ば雲に隠し、その斜上に社の築地と竹藪とをほのかに描き添えて巻をおえている。詞書の長歌の最後に近く「神の北野におもむけば……」とあるのに対応するものであることは間違いない。

なお、この鳥居や玉垣の有様は、同じく白描本の「北野本地絵」に描かれた北野天神社の社頭の景色にも相通じている。

六 「隆房卿艶詞絵」の性格

このように詞書の原拠から主人公たちの名前やその恋の物語を知った上で、各段の図様をあらためてみた結果はどうであろうか。私

挿図8. 隆房卿艶詞絵 第一段 葦手がき (のとかに)

たちはこの絵巻の性格を、そこにかなりはっきりと読みとることができる。

まず気づくのはこの絵巻が隆房と小督の悲恋を筋を追って描こうとする「物語絵」的なものではなく、恋の情緒を象徴的に表現しようとした「歌絵」的な性格が強いことである。もともと詞書としての「隆房卿艶詞」の長歌自体が、数十首の歌と詞の組みあわせによって織りだされた恋の起伏を、最後にしめ括ったものであるだけに、具体的な内容には乏しい。しかしなお本文全体を心得た上で場面を

挿図9. 同上 第二段 葦手がき (木たかき)

構成してゆけば、かの平家物語にも引かれた「たまづさは……」の一段のごとき物語的な内容を盛りこんだ構図をも作り得たはずである。しかしこの絵の作者はそうした具体的な物語を連想させる表現をわざと避けたかとさえ思われる。詞書と絵とを直接関連させるのは、前述のように三ヶ所に書きこまれた葦手の文字であるが、これとても特にその文字の記された場面とテキストの内容とを結びつけるものとは言えない。

たとえば第一段の咲き盛る桜樹に寄せた「のとかに」の四字と、第二段、松にかかる藤の蔓になぞらえた「木たかき」の文字は、詞書の長歌ではごく初め、第八句と第十四句から続けてとられておりその前後の詩句が特に各場面の内容を暗示するものと思われない。むしろもっと即物的に、第一段の場合では、雲間に大きく姿をあらわした月と満開の桜花(挿図8)とが「春のみ山のはなになれいまは雲井の月かげのどかにてらす」という詞の内容にそのまま関連するにすぎない。そして葦手に描かれた朧月と桜花という、これら全体が美しい春の景物として向いあった一組の男女の姿に添えられ、隆房と小督との楽しかった恋の発端を暗示しているのだと思われる。

第二段の葦手がき、松と藤(挿図9)とが「かすがの山のふぢなみの木だかき色に……」に直接かかることは、佐々木、田中両氏の命名が偶然この「ふぢなみ」に一致したことによっても明らかである。この場合も、テキスト自体がこの前後で暗示するものは、藤

原氏に属する隆房が時の権力者清盛の女を妻としながらも、やはり同じ藤原氏の高貴な血をひく小督にひそかに心惹かれていったことであろう。しかし絵のなかではこの松と藤とは、そのような暗示をふくみながらも、一方で情趣に富んだ初夏の景物として、前段の春からの季節感の推移、ひいては小督の宮仕えによる二人の別離という運命の大きな転換をあらわしている。建物によって前後二つの部分に分れるこの第二段は、前述のように、高倉天皇の後宮における華やかな女房たちに打ちまじりながら、わざと自分をさけて姿を見せぬ小督を求めて思い乱れる隆房の憂愁と、彼との思い出をなつかしみながらも現在の運命を甘受し、しかも一方、高倉天皇の寵愛に對しても清盛方からの敵意にかこまれている小督の孤独とを、象徴

的に表現したものと解せられる。この第二段末尾にあらわされた早春の梅と柳（挿図10）、そこに描きこまれた「としたち」の四字は、詞書でいえば中ほど（第八八句）に当り、「としたちかえる いそぎにも なにぞは春の ひかりとも」の詩句をふまえて、いつしか月日が流れ、ふたたび新春をむかえたことを暗示する。前の藤波の示す初夏からこの新春まで一場面のうちに長い時間の流れを象徴するこの手法は、「隆房卿艶詞」の眼目が、返らぬ恋にもだえながら、むなくしく月日を送りむかえる隆房の悲哀を歌ったものだけに、きわめて適切なものがあると言えよう。

これらにくらべると、隆房と高倉天皇、そしておそらくは小督の三人を対置したものと私の解釈した第三段は、一層象徴的である。こうした場面の記述は詞書の長歌はもとより、「隆房卿艶詞」のテキストにも直接にはあらわれてこない。しかしこの歌物語の背景となった史実を知るものにとつては、この三人の姿こそすべての悲劇性の象徴として大きく浮かびあがるにちがいない。

最後の北野社頭の情景は、詞書長歌の終りに近い「さてもかたえの もろ人に またさそはれて ちはやふる 神の北野に おもむけば」に直接つながっている。しかしやはり一台の車を霞ごしにのぞかせ、参詣の女人たちを風情ある点景として描き添えるだけで、隆房自身の姿を客観的に表現することはしない。長歌自体のなかでもそうであるように、雨もよいの社頭の陰鬱な眺めを、隆房自身の灰色な心象風景として描きだし、報いらぬ恋の終りを暗示してい

る。

このように場面場面をたどってみると、最初に「歌絵」的といったこの絵巻の性格がさらに明らかになるであろう。それは隆房と小督の恋、というより小督によって隆房自身の心のなかに波立った恋の情趣を、その四つの時点において、一人称的に描きだしたものともしえる。四つの歌絵の重なりあい、季節の流れのなかに展開するひとつの恋の物語をおのずと暗示してゆく。これはテキストとしての「隆房卿艶詞」が、十二世紀末という時代の降った著作であるにもかかわらず、歌集の詞書から歌物語へという、平安時代における物語発生の原初形態を示していることと、非常によく照応している。

それは単にこの種のテキストの絵画化として適切だったというばかりではない。さらに絵画史自体の問題としても、歌絵の連続がやがて物語絵をつくってゆくという十世紀前半ころの情況をある程度再現してくれる。源氏物語絵巻のような完成した物語絵においてすら、その各場面は物語の筋を説明するというよりは、各段それぞれの情趣の表現を眼目としてしていることは、私もこれまで多くの機会にのべてきた。^{註11}「隆房卿艶詞絵」は、この点において源氏物語絵巻などに内在する歌絵的な性格を、一層明瞭に示したものと言えよう。

七 制作の年代とその背景

こうした特異な性格を有する「隆房卿艶詞絵」は、様式や技法の

挿図11. 隆房卿艶詞絵 男の顔 (拡大)

上でどのように位置づけられるであろうか。また、その制作の時代的な背景はどのように考えられようか。

挿図12. 同 女の顔 (拡大)

源氏物語絵巻系の女絵の画態を、細い墨の線一色で描きだし、女の髪や男の冠、建物の一部などを示す濃い墨の面でアクセントを加えてゆく、いわゆる「白描やまと絵」の独特の技法が、十三世紀から十四世紀にかけてすくなくならぬ作例を残していることは改めて言うまでもない。下絵的なもの、あるいは歌仙絵などを別にして、大和文華館蔵源氏物語「浮舟」帖の挿図、浅野家蔵枕草紙絵巻、前田家蔵豊明絵草紙などがまずあげられ、さらに諸家分蔵の尹大納言草紙、松永安左衛門・前田青邨両氏蔵の平家公達草紙などがこれに続く。これらに「隆房卿艶詞絵」を加えて、全般の様式関係を論ずることは、この一

挿図13. 枕草紙絵巻
男の顔 (拡大)

挿図16. 源氏物語「浮舟帖」
男の顔 (拡大)

挿図15. 同右 女の顔 (拡大)

挿図14. 豊明絵草紙
男の顔 (拡大)

文の範囲を越えると思われるので、ここにはただ主題とする絵巻を中心に、次の諸点を指摘するにとどめたい。

第一は、図様や表現の性格について示唆したような、十二世紀につながる古い要素が、この絵巻の技法や様式の細部にまで認められることである。まず人物、男女の顔の表現を他の作例と比較してみるがよい。拡大写真(挿図11・12)によって明らかのように、この絵巻の人物においては、いわゆる引目鉤鼻の顔立ちの一線一線が、細く固い、ただ一筋の線条ではなく、さらに細い幾本もの線をひき重ねてできている。これは丁度、源氏物語絵巻の男女の顔を描きおこす世にも繊細な技法を思わせる。着衣の線、殊に頸上くびかみの形は、何回も引き直した後に決定的な一線が選ばれており、冠の形も下図よりさらに小ぶりに黒く塗り上げているなど、すべてに自由な表現法が感ぜられる。この特色は比較のため同じく拡大写真を示した枕草紙絵巻(挿図13)や豊明絵草紙(挿図14・15)の人物描写と比較してみれば一そう明瞭であろう。枕草紙絵巻の場合、別の下図を機械的に敷き写したかと思われるほど、線は固く、ぎこちなく、もちろんただ一本で引かれている。豊明絵草紙の場合は線自体はこれよりは細やかに、いきが通っているが、やはり最初から一線にひかれる。しかも、その眼の描き方は、もはやただ一筋の線に軽く一点を加えた本来の引目ではなく、上瞼と下瞼とを描きわけ、その間に瞳を点じた形となっている。このような傾向はつくり絵の系統においても紫式部日記絵巻などにすでにあらわれており、^{註12}十三世紀後半における古

典の様式の解体現象として理解される。これらにくらべれば隆房卿艶詞絵の人物表現が、より古い系統に属することは否定できない。わずかに浮舟帖挿図の人物表現(挿図16)がそのやわらかさにおいてこれに近いものを示している。

それならば人物表現のこの特色はそのまま作品の古さとして理解されうるであろうか。鈴木敬三氏に風俗描写の特徴をうかがった結果によると、古い要素と新しい要素との奇妙な混在を指摘された。そして特に女房装束の唐衣からぎぬと裳のつけ方が紫式部日記絵巻よりも後の段階を示すこと、また最終段の宮詣でする女たちの、被衣かぎの上にかけた掛帯かけおびがかなり幅広く描かれている点などは、むしろ十三世紀末、十四世紀初までも下降させられうる要素であると言われる。構図や表現のなかに残る古い要素は、するとこの絵巻のさらに原本となった古い図からここに伝えられたものと見るべきであろうか。しかし現存のこの絵巻は全巻がよく表現上の統一を保ち、また転写に伴うくずれなども積極的には認められない。

むしろこの問題をとく鍵は、この絵巻自身の性格と、それを生み出した十三世紀後半における時代の背景のなかにあるのではあるまいか。ことに隆房と小督との悲恋が一世紀近くをへだてたこの頃になって、改めて人々の心に蘇ってきたのではないかという推測が次の諸点から可能になる。

1 隆房の歌は、彼の生前から鎌倉時代を通じて、代々の勅撰集に数首ずつ収められている。そのなかには、隆房卿艶詞に収められ

た小督との恋の歌が多く、その推移を整理すると、次の表ようになる。

勅撰集にのせられた隆房の作歌（◎印は「艶詞」所収の歌）

- 文治 三 (1187) 「干載集」隆房歌（春上1、旅1、恋1、恋三1、◎恋五1）
- 元久 二 (1205) 「新古今集」二首（賀1、恋二1）
- 貞永 一 (1232) 「新勅撰集」五首（秋上1、秋下1、恋二1、◎恋四2）
- 建長 三 (1251) 「続後撰集」三首（夏1、秋中1、恋三1）
- 文永 二 (1265) 「続古今集」三首（恋一1、恋五2）
- 弘安 二 (1279) 「続拾遺集」三首（夏1、冬1、◎恋一1）
- 嘉元 一 (1303) 「新後撰集」二首（恋一1、◎恋二1）
- 正和 二 (1313) 「玉葉集」三首（◎恋一1、◎恋三2）
- 元応 二 (1320) 「続千載集」一首（冬1）
- 正中 二 (1325) 「続後拾遺集」一首（神1）
- 延文 四 (1359) 「新千載集」一首（夏1）
- 貞治 三 (1364) 「新拾遺集」二首（冬1、恋二1）
- 永徳 三 (1383) 「新後拾遺集」一首（雜秋1）
- 永享 一 (1429) 「新続古今集」一首（別1）

ここで注意をひくのは、この艶詞と一致する恋の歌が、弘安二年（一二七九）撰の「後拾遺集」から正和二年（一三三三）の「玉葉集」までの勅撰集につづけて五首も採られていることである。

2 また先に述べた平家物語中における小督と隆房との挿話は、十三世紀はじめ（元久二年—承久元年 1204—1218）に成立した最初の平家物語には含まれておらず、十三世紀後半にいたって、「隆房卿艶詞

「隆房卿艶詞絵」をめぐって

（たかふさの恋づくし）」などを原拠として複雑な説話がつけ加わっていったものと考えられる。後藤丹治氏はこの間の事情を「思うに、この小督局の事はもと平家物語の根源の本には書かれてなかったのを長門本の如き説話が出来、次に艶詞の文を付加した流布本その他の諸本の記載が成ったのではなからうか」と記される^{註13}。さらに中西美智子氏は「平家物語成長変化の一断面——屋代本「小督」と他本との関係——」（文学・語学第四号、昭和三年六月）において、この小督説話を第三巻においた屋代本の方が、第六巻においた流布本や、さらに長門本、延慶本よりは早い形を示すものと推定された。しかしいずれにせよ、隆房と小督の物語が平家物語のなかにとりあげられてくるのは、十三世紀後半における平家物語の本文発展のひとつである。

3 中村義雄氏が本号所載の別稿で詳しく考証されたように、現在二種二巻の伝本でのごさされている白描の物語絵「平家公達草紙」は、安元二年の後白河法皇五十賀における維盛の雅びな舞姿の記述をはじめ、「安元御賀記」の作者でもある隆房との関係を思わせる点が少ない。松永・前田両家に現存する一巻はその小じんまりした構図法や充分のびきらぬ線描など、十四世紀前半への下降を思わせる。しかし東京国立博物館の模本一巻は、その原本の図柄が十三世紀後半にまで遡りうることを感じさせる。このような性格の白描絵巻が、やはり同じ時期に成立していることは、現存の形では様式上の結びつきまでは指摘できぬにせよ、原作者としての隆房を共通

にする点で、やはり示唆に富んでいる。

これらの諸点を総合して考えると、平家時代の風雅、特にその代表的才子のひとりである隆房への興味が、この十三世紀後半の京都において、宮廷的な文芸復興の一つのあらわれとして強く働いていたものと考えられる。隆房卿艶詞を絵巻化するというこの試みもまたかような動きの一部として理解されるのではなからうか。この絵巻の表現中にある意外に古い要素は、古代的な貴族文化が最後の余映を見せた平家時代への懐古が、平安時代の歌絵・物語絵の伝統をかえって純粹によびさましたものと考えられる。(一九六一年三月)

〔追記〕

本稿脱稿後、京都国立博物館における昨年の特別展覧会の記念図録「日本の説話画」(便利堂刊)が上梓された。梅津次郎氏執筆によるその解説には「近頃、市古教授の示教によって……」としてこの詞書が伝隆房作の艶詞の後半であることが分ったと報ぜられ、絵巻の題名をも「艶詞絵」に改められている。この新称呼をいち早く公式に採用された同氏の英断に敬意を表する。

註

- 1 佐々木信綱「住吉物語絵巻の文詞と藤波絵巻」思想一〇四号、一九三一年一月。なお同博士が昭和二十七年日本学士院紀要十の三にのせられた「古文献の二三について」という一文中にもほぼ同趣旨の紹介がなされている。
- 2 後藤丹治「戦記物語の研究」(昭和十一年初版、昭和十九年改訂版)、前編、平家物語、第一、平家物語出典考、第四章、紀行及歌書、第三節、隆房卿艶詞。なお同書付録、研究補遺にも隆房卿艶詞に関する一節があり、市古氏の論文はここに紹介されている。
- 3 市古貞治「艶書小説の考察」(国語と国文学、昭和十二年一月)註四
- 4 ただ市古氏のこの発見が国文学の方面でどの程度一般に知られているかは疑問である。佐々木博士も戦後やはり旧説のままを発表しておられるし、また近刊の「群

書解題」十九卷所収、「艶詞」解題(久保忠夫氏執筆)にも絵巻との関連には触れられていない。

- 5 高松宮本(有栖川宮家伝来)「四条大納言日記」について、この機会に調査の結果を記しておく。この本は大和綴墨付四七丁、縹紙は薄緑地雲母刷で鳳凰唐草文をあらわすが、この紙が本願寺本三十六人集「かねすけ」の縹紙に用いられた唐紙の模刷であることを、伊東卓治氏から注意された。近衛三義院や豫楽院などが古唐紙を模造させた、その風雅の事業につながるものと言われる。寸法は縹紙で縦二八・二センチ、横二〇・二センチ、本紙横幅は一八・八センチ。一紙十行の入念な筆写で書写年代は江戸時代中期。縹紙左肩に「四条大納言日記」と墨書し、第二紙裏、本文の第一行に「たかふさの恋つくし」という内題がある。奥書、藏書印などもなく本の系統や伝来は不明であるが、前記した縹紙の特色や本紙の具合など、桂宮本などに近い美本である。特に調査撮影を許可された高松宮殿下並びに便宜を与えられた吉島事務官に厚く謝意を表する。
- 6 延慶本平家物語では、この「玉づさを……」の歌のあとに更に次の挿話を入れ、一首を加えている。

「加様ニロスサヒテ泣と、罷出ニケリ、今生ニハ会ム事モカタケレハ今ハ生テモ何カセム、仏神三宝願ハ命ヲ召テ後世ヲ助ケサセ給ヘトソ、明テモ晩テモ被祈ケル、カカル中ニモ隆房カクソヨマレケル

恋シナハウカレム玉ヨシハシタニワカ思人ノツマニトマレ」

この歌は「隆房卿艶詞」の歌物語の最後(長歌の直前)に次の詞書を伴っておかれており、また、すでに隆房在世当時、千載和歌集(文治三年1167撰)恋の部にも収められた。

「あみぬ事の後まで、心にかからん事の、返す返すあぢきなくて

恋しなばうかれん玉よ暫しだに我思う人の棲にとどまれ」

ところが一方、長門本平家物語では、小督(小河)と隆房との恋物語はごく簡単にしか描かれず、「艶詞」よりの二首の歌も引かれていない。

長門本 卷第十二、(小河局事)

「小松大臣うせ給て後程なく、入道悪逆を極給けり、其頃少納言入道信西の末の娘に天下第一の美人有けり、容色もこまやかに芸能も世にすぐれたり……、三条小

河に住給ひければ小河^{こが}のとぞ申ける、盛まだしき程に、冷泉大納言の未だ少将にてまし／＼ける時、何としてか見奉り給けん、人不^レ知おもひの病と成て、ひまなく御交通はしけれども、聞も入給はず、折節主上かかる人おはずと聞召て、小河殿を忍び／＼夜な／＼御召あり、御気色浅からざりければ、しのびて内裏に候はせ給ひけり、冷泉少将もこの事を聞かるゝより、さしたる用はなけれども、もしや余所ながらも見参もせて慰むかたもやとて、夜の明れば出仕とて、毎日参内有て、くつがたの板の御間に小河殿は住み給ひけり、其のあたりをは常に通ひ給ひけり、去れども見奉ること更になし、されば逢はぬ恋にうつもれて、絶て有べしとおもはず、とてもかくても無^二甲斐^一出仕なれば、宿所に引かづていかげんとぞ泣れる……」

平家物語成長過程における長門本の位置については諸説あるが、後述のように、後藤丹治氏はこの簡単な小督説話が更に発達して流布本系のものになったと見なされる。

7 玉井幸助校註「健寿御前日記」(朝日古典全書版)一六〇ページ

8 「清齋眼抄」(群書類従、公事部所収)は編者不明ながら平安末期の検非違使関係の故実先例を詳記する。鈴木敬三氏によれば、ここに屢々引かれた「後清録記」は左志清原季光の筆になるといふ。

一、内裏近隣炎上事付開評

後清録記云、安元元年乙未十一月廿日丁卯、天晴、未剋許、東寺僧正禎喜壇所^{イ善}(内御持僧、姉小^イ路)大宮、故兼成宅)焼亡、風起^ニ東北^一、餘炎及^ニ禁裡^一(^ニ二條南油小路^一已東、閑院殿)已至^ニ于^一押小路東油小路西^一落灰燼了、其間主上出^ニ御南殿^一、公卿殿上人群参……

9 この同じ歌は正和二年(一一三三)撰の「玉葉和歌集」に収められているが、その詞書には次のようにある。

安元の御賀に地久をまひ侍りけるうちにも心にかかるとのみ侍りければ

10 小督の事蹟は、彼女が平家物語中における最も美しい一挿話の主人公であるだけに、諸家の考証が行われている。特に桜井秀氏は早く、

「史実としての小督局と滝口入道」(わか竹、十二ノ十、大正八年十月)

「小督局と滝口入道」(太陽、二八ノ十三、大正十一年十一月)

の二論文で、山槐記、玉葉などをひいて彼等の実在と、その宮仕えの年月を考証さ

れた。氏は小督と隆房の年齢的關係から入内以前における二人の恋愛關係には疑問をいだかれたが、入内を承安三年(小督一七、隆房二六)頃とすれば、この点は、充分可能と考えられる。その後、後藤丹治氏、佐々木八郎氏など、平家原典の研究家、いづれもこの問題にふれ、後述の中西美智子氏論文にもその要約が述べられている。

これらの結果に基づいた伝記資料を関係年表のなかに隆房の伝と対照させて整理した。本文にのべたほかその要約を示すと次のようになる。「山槐記」に「去年冬為尼、生年二十三也」とあることから保元二年1157の生れと知られ、父については「玉葉」の記事によって、流布本平家物語の伝える藤原成範女が正しいと思われる。

「健寿御前日記」によれば承安四年1174には宮仕えしてまだ間もないことが察せられる。すると隆房との恋はその直前承安初年に芽生えたこととなろう。治承元年1177には皇女を生んだ(玉葉)が、同三年冬に前記のように二三歳で尼になった。健寿御前は承安四年から二十年余りの後、即ち建久五年1194頃に嵯峨で彼女と邂逅しており、さらに定家も恐らく最後に近い彼女の消息を次のようにかき残している。

「明月記」元久二年閏七月

廿日 早且行嵯峨

廿一日 昏黒行向高倉院督殿宿所皇后宮御母儀日来病悩被待時之由聞之、年来此辺聞馴之人也、仍訪之、女房出逢、即飯宿所

してみると、平家物語に「入道相国(清盛)……小督殿を捕へつつ、尼になしてぞ追放たる、歳二十三……濃き墨染にやつれ果て、嵯峨の奥にぞ栖まれける」とあるその伝えも史実に矛盾しないこととなる。

11 拙稿「源氏物語絵巻についての新知見」(美術研究、一七四号)、「源氏物語絵巻の特質」(大和文華、三二号)など参照。

12 拙稿「紫式部日記絵巻」(図版解説)(国華七七四号)参照

13 後藤氏前掲書(註2参照)。さらに同氏は最近の論文「平家物語の諸問題」(慶応義塾大学国文学研究会編、国文学論叢第二輯、中世文学、昭和三年所収)においても、この隆房脚艶詞と平家物語の關係をとりあげられ、隆房が自ら記したこの恋物語が平家物語中の説話に潤色されてゆく過程には先行文学、特に源氏物語夕顔巻の趣好が加味されているのではないかと新たな推定を加えておられる。

関係年表

| 年号 | 西暦 | 隆房事蹟 | 小督事蹟 | その他 |
|-----|------|-------------------------------|--|---------------------------|
| 久安四 | 一一四八 | 隆房生る、父藤原四條隆季、母加賀守高階宗章女 | 小督生る、父権中納言藤原成範 | |
| 保元二 | 一一五七 | | | |
| 永暦一 | 一一六〇 | 加賀守に任ぜらる | | |
| 應保一 | 一一六一 | 因幡守に任ぜらる | | 高倉天皇生る 父後白河法皇、母建春門院平滋子 |
| 長寛一 | 一一六三 | 從五位上 | | |
| 永万一 | 一一六五 | 左兵衛権佐を兼る | | |
| 仁安一 | 一一六六 | 右少將に任ぜらる | | |
| 三 | 一一六八 | 正五位下↓從四位下 | | 高倉天皇即位、建春門院に出任年十二 |
| 嘉応二 | 一一七〇 | 一〇・一六建春門院平滋子法性寺殿歌合に出席 | | 平徳子(清盛二女、後の建礼門院)高倉帝の女御となる |
| 承安一 | 一一七一 | | | 平徳子中宮となる |
| 二 | 一一七二 | 從四位上、長男隆衡生る、母平清盛女 | 小督、この間に入内か | |
| 三 | 一一七三 | | | この頃建礼門院右京大夫宮仕に出る |
| 四 | 一一七四 | 正四位 | 三・七一〇高倉天皇方違のため法性寺殿に行幸、御供りに「小督の殿」あり(建春御前日記) | |
| 安元一 | 一一七五 | | | 十一・二〇内裏に近火あり |
| 二 | 一一七六 | 三・四一六後白河法皇五十賀、隆房参会「安元御賀記」の作あり | | |
| 治承一 | 一一七七 | 「艶詞」の成立この頃か | 十一・二一三小督、高倉帝の皇女を生む(玉葉) | |
| 二 | 一一七八 | 三・二五別雷社歌合に出席 | | 建礼門院右京大夫宮仕を辞す |

| 年号 | 西暦 | 事蹟 | 備考 |
|------|------|---|-----------------------------------|
| 三 | 一一七九 | 右中將に任ぜらる | 小督尼となる(山槐記) |
| 四 | 一一八〇 | | 生年二三(山槐記) |
| 養和一 | 一一八一 | | 内親王、初めて齋院となる(山槐記) |
| 寿永二 | 一一八三 | 左中將、藏人頭↓参議、右兵衛督に任ぜらる | |
| (元暦) | 一一八四 | 從三位 | |
| (文治) | 一一八五 | 父隆季死す | |
| 文治三 | 一一八七 | 左兵衛督、別当に任ぜらる、「千載集」なる、隆房歌五首入る | |
| 四 | 一一八八 | 権中納言、正三位 | |
| 五 | 一一八九 | 右衛門督 | |
| 建久二 | 一一九一 | | |
| 三 | 一一九二 | 左衛門督 | |
| 五 | 一一九四 | | |
| 六 | 一一九五 | 從三位、一・二〇民部卿經房、家歌合に出席 | この頃、健寿御前返す |
| 七 | 一一九六 | 三・二藤原兼実の宇治平等院参詣に同行、作歌す | |
| 正治一 | 一一九九 | 中納言に任ぜらる | |
| 二 | 一二〇〇 | 三・五御室撰仁和寺守覚法親王歌合に出席、後鳥羽上皇に百首和歌詠進、中納言を辞退 | |
| 建仁二 | 一二〇二 | 五・二六影供歌合に出席 | |
| 元久一 | 一二〇四 | 遷任、権大納言に任ぜらる | |
| 二 | 一二〇五 | 一・二九辞退、「新古今集」なる、隆房歌二首入る(前大納言隆房) | 問七・二一定家、嵯峨にて重病の小督(高倉院督殿)を見舞う(明月記) |
| 建永一 | 一二〇六 | 六・二三出家、法名寂恵 | |

「隆房卿艶詞絵」(浅田長平氏蔵) 詞書校刊

諸本との対校
 A 群書類従、雑部所収「艶詞」
 B 扶桑拾葉集所収「艶詞」
 C 高松宮家蔵「四条大納言日記」(「たかふさの恋つくし」)

○真名、仮名の相違は特に註記しない

○詞書に傍点をつけた三箇所は画中に葦手がきされた文字

さてもわが 君につかへて こしかたは
 A・B・C さてもわれ

春のみ山の はなになれ いまは雲井の
 A・B・C 春は

月かげの のどかにてらす 御代にあひて

心ゆく事 おほけれど かすがの山の

5 ぶぢなみの 木だかき色に ひとしれぬ

心をつくし そめしより ねてもさめても

わすられぬ 思のみなる よしなさよ

かつみるうちも むねさはぎ みぬまはまして

けふいくか いつかくと またれつつ

10 さるはまたみる たびごとに 人にことなる

ふしぐは はかなき事も さもぞたゞ
 A・B・C ふししはは
 B さてもただ

ためしもなきと おもひしむ ことのおほさは

長はまの まさごのかずに たとへても
 A・B・C なか川の

あかずおぼえて なにとして かくしも人に
 A かへしも

15 ことなると 思ふにつけて なかくくに
 A・B・C 思ひにつけて

つらくさへこそ おぼえけれ けふ又みても

またこひし 見るかひおほき たまづさは

さらにもいはず 手にふれし 物としなれば
 はかもなき ちりのはしまで なつかしみ
 とりつみぞおく かくままでに たゞあぢきなく
 おぼゆるに みかさの山の さかき葉の
 宮このたびに うつるとか あめの下みな
 さはぎつゝ わきて如何にと おもふにも
 さはぐ心は しほかぜに くだくる浪に
 ことならず いかによとのみ やすげなく
 思ふもしるし 雲のうへに かよひしみちは
 たえまおほみ たまくはたゞ ともしびの
 影ほのかなる よひのまの なごりはさらに
 さてしもぞ せむかたもなき こちなる
 としたちかへる いそぎにも なにぞは春の
 ひかりとも たれをかまたむ すさまじや
 花のにしきを たちきても 君みぬ色は
 ものうくて こといみしあへぬ なみだこそ
 たもとにかゝれ かくしつゝ む月のここぬか
 やゝふけし 夜はにあひみし そのほどの
 心のまどひ いへばえに たとへていはん
 かたもなし そのうちさらに 恋しさの
 色をそへぬる 心地して やがてうかれし
 たましめは 袖のなかにや いらにけむ

A · B · C 物としなれば
 A · B とりつみておく
 C とりつみておく

25
 ことならず いかによとのみ やすげなく
 思ふもしるし 雲のうへに かよひしみちは
 たえまおほみ たまくはたゞ ともしびの
 影ほのかなる よひのまの なごりはさらに
 さてしもぞ せむかたもなき こちなる
 としたちかへる いそぎにも なにぞは春の
 ひかりとも たれをかまたむ すさまじや
 花のにしきを たちきても 君みぬ色は
 ものうくて こといみしあへぬ なみだこそ
 たもとにかゝれ かくしつゝ む月のここぬか
 やゝふけし 夜はにあひみし そのほどの
 心のまどひ いへばえに たとへていはん
 かたもなし そのうちさらに 恋しさの
 色をそへぬる 心地して やがてうかれし
 たましめは 袖のなかにや いらにけむ

A · B · C おほかぜに
 A · B · C 傍線ノ二句ナシ
 A · B · C 思ふもくるし
 A · B · C たまくかかく

30
 ことならず いかによとのみ やすげなく
 思ふもしるし 雲のうへに かよひしみちは
 たえまおほみ たまくはたゞ ともしびの
 影ほのかなる よひのまの なごりはさらに
 さてしもぞ せむかたもなき こちなる
 としたちかへる いそぎにも なにぞは春の
 ひかりとも たれをかまたむ すさまじや
 花のにしきを たちきても 君みぬ色は
 ものうくて こといみしあへぬ なみだこそ
 たもとにかゝれ かくしつゝ む月のここぬか
 やゝふけし 夜はにあひみし そのほどの
 心のまどひ いへばえに たとへていはん
 かたもなし そのうちさらに 恋しさの
 色をそへぬる 心地して やがてうかれし
 たましめは 袖のなかにや いらにけむ

A · B · C なにか春の
 A · B · C ひかりとも
 A きこえぬ色は
 C A · B ことにもあらぬ
 A · B む月とへぬる
 C むつきここぬか

35
 ことならず いかによとのみ やすげなく
 思ふもしるし 雲のうへに かよひしみちは
 たえまおほみ たまくはたゞ ともしびの
 影ほのかなる よひのまの なごりはさらに
 さてしもぞ せむかたもなき こちなる
 としたちかへる いそぎにも なにぞは春の
 ひかりとも たれをかまたむ すさまじや
 花のにしきを たちきても 君みぬ色は
 ものうくて こといみしあへぬ なみだこそ
 たもとにかゝれ かくしつゝ む月のここぬか
 やゝふけし 夜はにあひみし そのほどの
 心のまどひ いへばえに たとへていはん
 かたもなし そのうちさらに 恋しさの
 色をそへぬる 心地して やがてうかれし
 たましめは 袖のなかにや いらにけむ

A · B · C 心のまよひ……いはむ
 C A · B ことにもあらぬ
 A · B む月とへぬる
 C むつきここぬか

35
 ことならず いかによとのみ やすげなく
 思ふもしるし 雲のうへに かよひしみちは
 たえまおほみ たまくはたゞ ともしびの
 影ほのかなる よひのまの なごりはさらに
 さてしもぞ せむかたもなき こちなる
 としたちかへる いそぎにも なにぞは春の
 ひかりとも たれをかまたむ すさまじや
 花のにしきを たちきても 君みぬ色は
 ものうくて こといみしあへぬ なみだこそ
 たもとにかゝれ かくしつゝ む月のここぬか
 やゝふけし 夜はにあひみし そのほどの
 心のまどひ いへばえに たとへていはん
 かたもなし そのうちさらに 恋しさの
 色をそへぬる 心地して やがてうかれし
 たましめは 袖のなかにや いらにけむ

A たましめは

40 身にはかへらず つくくくと ながむるころ

いとどしく あられぬまゝに さりとては

神ほとけにぞ いのらめと たのみなれにし

みたらしの 水のながれを たづねても

みそぎかひなき あぢきなき さてもかたえの

45 もろ人に またさそはれて ちはやぶる

神の北野に おもむけば はれぬころを

しりがほに 空さへくれし あめのうち

あまやどりして をぐるまを かれとばかりに

見やられし 竹のひとむら めにかけて

50 さてだにしばし あらばやと 思ふかひなく

やりすぐる なごりよいかに これさへに

忍がたきを こまならば ひのくま河に

あらずとも ひきもとめまし あやにくに

とをざかりゆく 木ずゑさへ ほのかになりし

55 ほどはげに そろにすゝむ なみだこそ

せきもとまらず おちまされ さてもかゝらぬ

おりならば てうはい節会 じよゑ除目

これらのたより さな□も みましなれまし

いはましと たゞおも影の たちぞゝふ

60 春になりても けふははや 廿日になりぬ

あかざりし たゞ一たびの ときのまの

C B
あぢきなき
さてもかたへの

C A C
A B
なごりにいかに
そよさら
そよさら
それさらに
まはなくて
あかざとも
あかざとも
あらずとも
ひきもとめて
ひきもとめて
ひきもとめて
ひきもとめて

A B C
A B C
とまらぬ
ほどよげに
C
A C
B A C
おりくの
をりくの
これらを
これらを
さならでも

そればかりなる うきよげに 如何にやいかに
いかにせむ く

ふりかすむ雨に

涙もおちそひて「かき

くらすれし

みちの空」かな

ためしなき

心のうちをことの葉」に

いはらあさくも

なりぬべき」かな

しるらめややどの

木ずゑをかれと」のみ

なみだのうちに

ながめやる」と「も

A A
C A B
うきよげに
如何にせむく
いかにせんく

A B C
雨も

A B C
涙も立そひて

A B C
くらすれし

A B C
みちの空」かな

A B C
ことの葉の

A B C
いはらあさくも

A B C
コノ一首ナシ

| 隆房卿艶詞絵 | | 法量 |
|--------|--------------|-------|
| 縦 | 25.3 cm | |
| 横 | (全) 684.9 cm | |
| 第1紙 | 53.0 | } 詞 |
| 2 | 53.0 | |
| 3 | 54.0 | |
| 4 | 54.0 | |
| 5 | 52.1 | } 絵 1 |
| 6 | 53.5 | |
| 7 | 49.5 | } 絵 2 |
| 8 | 53.4 | |
| 9 | 53.2 | } 絵 3 |
| 10 | 53.0 | |
| 11 | 53.4 | |
| 12 | 53.0 | |
| 13 | 49.8 | } 絵 4 |